

シンポジウム

奄美の森と海のつながり

～水と砂の流れを考える～

奄美の世界自然遺産登録についてのシンポジウム

2017/ **6/10** 13:30-18:00

於：奄美市名瀬公民館 金久分館
(tel 0997-53-5699)



第1部 講演 (向井 宏・山下博由・新村安雄・安部真理子)

第2部 現地からの報告(嘉徳海岸・市採石場)



入場無料
申込み不要

奄美の森と海のつながり

～水と砂の流れを考える～

主催：海の生き物を守る会 自然と文化を守る奄美会議

後援：公益財団法人 日本自然保護協会

プログラム

13:30-13:40 開会の挨拶 大津 幸夫 (自然と文化を守る奄美会議)

第1部 講演

13:35-14:15 「奄美の海を世界自然遺産に！」

向井 宏 (海の生き物を守る会)

14:20-15:00 「亜熱帯最後の川ーリュウキュウアユ年代記」

新村 安雄 (リバーリバイバル研究所)

15:00-15:15 ~~~休憩~~~

15:15-15:55 「貝類から見た奄美の海岸環境の貴重性」

山下 博由 (貝類多様性研究所)

16:00-16:40 「世界自然遺産制度、森と海をつながり」

安部 真理子 (日本自然保護協会)

16:40-17:00 ~~~休憩~~~

第2部 現地からの報告

17:00-17:20 「嘉徳海岸について」

ジョン 高木

17:25-17:45 「住用町市の採石問題について」

住用町市集落代表

17:45-18:30 その他の事例、質疑応答、ディスカッション

【 講演者 】

向井 宏 (むかい ひろし)

海の生き物を守る会代表、北海道大学名誉教授。東京大学や北海道大学に勤務して、温帯（北海道・沖縄）および熱帯海域（パプアニューギニア・フィジー・タイ・フィリピンなど）のアマモ場生物群集の研究を続けてきた。また、近年はジュゴンの生態にも取り組んできた。藻場の研究から、海の環境を守るためには陸上の生態系の環境が重要であることを学び、北大を定年退職後、海の生き物を守る会を創設し、主として沿岸の生き物とその環境を守る運動を行うとともに、京都大学で特任教授として森里海連環学の研究と教育に取り組んできた。



山下 博由 (やました ひろよし) wildsea@almond.ocn.ne.jp

貝類研究者。貝類多様性研究所（神奈川県藤沢市）所長。1960年生まれ、大分県姫島村出身。貝類の分類や分布の研究を行い、各地の海岸生態系の保全活動を行う。環境省、福岡県、熊本県などのレッドデータブックの執筆を担当。著書に「干潟の自然と文化」など。山下由の名で、歌手・詩人（youtube, 見てください）。



新村 安雄 (にいむら やすお) niimuray@goo.jp

フォト・エコロジスト／環境コンサルタント
映像制作撮影 水域生態系に係わる調査・コンサルティング。
1989年 リュウキュウアユ研究会を設立 事務局長
水域の自然を回復する試みとして「リバーリバイバル研究所」を主宰。
現在：東京新聞/中日新聞紙上にて、隔週日曜日 コラム「川に生きる」を連載中。



安部真理子 (あべ まりこ) abe@nacsj.or.jp

日本自然保護協会 保護・研究部。大学、大学院にて生物学と生化学を専攻し、WWF ジャパンに8年間勤務。オーストラリアのジェームズクック大学院修士課程に留学し、続いて琉球大学博士課程にてアザミサンゴの多様性に関する研究で博士号（理学）を取得。1997年に日本国内でのリーフチェック立ち上げに関わった一人で、以来コーディネーターをつとめている。沖縄リーフチェック研究会会長、日本サンゴ礁学会評議員、沖縄県サンゴ礁保全推進協議会理事。現職の日本自然保護協会では2010年4月より沖縄の問題や日本の沿岸の問題を担当。



ジョン 高木 (じょん たかぎ)



住用町市



奄美の海を世界自然遺産に！

向井宏（海の生き物を守る会代表・北海道大学名誉教授）

今年国立公園になったばかりの奄美大島は徳之島、沖縄島北部、西表島とともに、世界自然遺産登録に向けて申請を行った。しかし、世界自然遺産に登録しようとするのは、奄美大島などの亜熱帯植物林の自然である。沿岸の海は、形の上では一部含まれているが、海を対象とした国立公園でもなければ、世界自然遺産でもない。美しい海に囲まれて存在するこれらの自然の保全を目的とする国立公園や世界自然遺産に、なぜ海と森のつながりが無視されるのだろうか。

「森は海の恋人」という自然保護を考えるスローガンがある。かつては森は森、海は海として別々に考えられてきた。しかし、森も海も閉鎖した生態系ではない。とくに沿岸の自然は、エコトーンと呼ばれるように、生物多様性の非常に高い生態系であるが、森の存在なくては存続できない生態系である。森林生態系の健全度を見るのには、海の健全度がもっとも良いバロメーターである。同時に、森は海の影響を多大に受けている。森が海へ与える影響の動的要因は、水や砂の流れのような物理的な動きに依っているのに対して、海が森に与える影響は、そのすべてが生物によってもたらされる。海からの揺り上げ、海鳥の捕食、魚類の遡上など、海は森を育ててみいる。その海と森のつながりを無視した国立公園や世界自然遺産は、本来ありえない。

今、世界自然遺産を目指している奄美大島では、それと逆行するように、山を削ってアマミノクロウサギなど希少な動物のすみかを奪い、海を汚してサンゴ礁を殺している。沖縄の軍事基地を作るためのみならず、奄美大島にも軍事基地を作って。

海での海砂の採取も、止めようとしなさい。海砂の採取と海岸の護岸は、単に景観を損なうだけではなく、森と海をつなぐを絶ち、水と砂の流れのバランスを壊し、森と海の相互依存をなくして、森林生態系や沿岸生態系の崩壊に繋がる。

奄美大島の自然を世界遺産にするために、山を壊し、海を汚すことを直ちに止めて、真に森と海をつなぐを保全して、南西諸島の黒潮と亜熱帯森林を含む大自然そのままの営みを子孫に伝えていこう。

貝類から見た奄美の海岸環境の貴重性

山下博由（貝類多様性研究所）

奄美群島は、亜熱帯に位置し、黒潮の流路にあること、サンゴ礁の発達などによって、海洋生物が豊かであることが知られている。

貝類は古くから食料として利用され、腕輪などの装飾具としても奄美経由の交易が知られている。その豊かな貝類（軟体動物）相の研究は、平瀬與一郎（1859～1925：日本の近代貝類学の創始者）の派遣した採集人によって行われ、陸産貝類（カタツムリ）を中心に多くの新種が発見された。黒田徳米は、1928年に「奄美大島産貝類目録」を発表した。その後も、多くの貝類愛好家・研究者が調査を続けてきた。名和（2008）は、奄美諸島の干潟貝類相の詳細な報告書を発表した。

ここでは、奄美の貝類相と海岸環境の特性・貴重性を報告する。

奄美の海岸の大部分は外洋域に面し、岩礁・サンゴ礁が優占している。岩礁・サンゴ礁海岸には、亜熱帯の外洋域に特徴的なヤコウガイ・テツボラなどが生息し、サンゴ礁池内は特に多様な貝類の生息地になっている。その多様性の高さは驚くべきもので、例えば笠利町平の土浜海岸は「打ち上げ貝」の種数が多いことで有名であるが、あまりにも種類が多いこと、正確な種名の分からないものも多いことから、正式な貝類リストは発表されていない。外洋に面した、礫浜・砂浜にはサンゴ礁（リーフ）のバリアがあるものとなないものがあり、それによって貝類相が異なる。大和村のヒエン浜は、比較的沖出しが短いリーフ内に砂礫浜があり、ビーチロックの産地として有名であるが、ここからはヒエンハマゴクリという極めて珍しい軟体動物が発見されている。リーフを欠く砂浜は、奄美群島では数えるほどしかなく、瀬戸内町嘉徳海岸、徳之島の山（さん）海岸などが知られているが、そこには、ナミノコガイ、キウシュウナミノコ、ワカガミなどの非リーフの砂浜に特徴的な貝類相が見られる（土田・黒住、1997；環境省）。サンゴ礁の発達する亜熱帯以南の島嶼の砂浜は、サンゴ片・有孔虫などの生物遺骸によって形成されているものがほとんどで、陸起源の土砂によって形成されているものは少ない。こうした陸砂起源の砂浜・砂底には、粒度の粗いサンゴ砂底に生息しない貝類群集が形成される。そうした砂浜は、サンゴ礁の優占する琉球列島ではごく少なく、飛び地的に分布している。こうしたことから、嘉徳海岸、山海岸の砂浜生態系の貴重性は高い。

奄美群島の中でも、大島・加計呂麻島には大小の河川と湾状地形があり、そこには内湾・干潟生態系が成立し、外洋とは異なった貝類が生息している。笠利湾・焼内湾・住用川河口、大島海峡の湾部などである。笠利湾奥の干潟には、腕足動物のミドリシャミセンガイ近似種が生息し、内湾性の貝類が90種以上確認されている（名和、2008）。住用川河口のマングローブ湿地には、シマカノコ、カリントウカワニナ、オカミミガイ類、ヒルギシジミなど、汽水域に特徴的な種が生息している。カリントウカワニナ（学名未決定種）は、奄美大島のみ分布し、海外に同種がいるかどうかよく分かっていない。リュウキュウザクラ・モモイロサギガイは、奄美では住用川の河口干潟でのみ確認されており、これは分

布の北限でもある。大島海峡のリアス式海岸には、久慈湾などの小湾とそれに付随する干潟が多く、名和（2008）は6ヶ所の干潟を記録している。メオトサルボウは、国内では大島海峡の干潟にのみ生息している。メオトサルボウは、ベトナム～東南アジアに分布の中心があり、大島海峡は飛地分布であると共に分布北限である。非常に貴重性が高いが、生息域は狭く、個体数も減少していると考えられる。大島海峡の小さな干潟は、別稿のように危機に瀕しており、その保全が望まれる。シマノハテマゴコロガイは、2000年に新種記載された種で、内湾干潟に生息するミナミアナジャコの腹部に共生するが、奄美以外では確認されていない。

以上のように、奄美には多様な海岸環境と、豊かな貝類の生息が見られ、注目される種も少なくない。しかし、特に砂浜・内湾干潟の環境・貝類群集は、近年の開発によって、危機的な状況にあると考えられる。名和（2008）は、道路工事、河川改修、護岸改修、漁港整備、離岸堤建設によって多くの干潟生態系・貝類群集がダメージを受けていることを報告している。こうした環境・生態系の破壊は、その価値が理解されていないことに大きな原因がある。奄美には、小河川や小さな干潟が多いが、その貴重性はよく理解されていない。「世界遺産」というような壮大で大袈裟な取り組みよりも、まず足元の「小さな自然」の美しさと価値が見直されるよう望みたい。それはこれまで、奄美人が大切にしてきたものであり、奄美人の質素で地に足のついた気質が、美しい島を守ってきたように思われる。

引用文献

名和 純，2008．琉球列島の干潟貝類相（1）奄美諸島．西宮市貝類館研究報告（5）．
土田英治・黒住耐二，1997．奄美諸島徳之島，山の海岸の貝類 ー特に外洋砂浜貝類群集についてー．
ちりぼたん，27（3，4）：75-81．



カリントウカワニナが生息する住用川
河口右岸の小流。

奄美 大島海峡の海岸線の危機

山下博由（貝類多様性研究所：神奈川県藤沢市）

奄美大島と加計呂麻島の間の大島海峡は、複雑な入江地形になっており、入江には小さな干潟が多く存在する。名和（2008）は奄美諸島の詳細な貝類調査を行い、大島海峡で7ヶ所の貝類相を報告しているが、豊かな貝類群集と貴重種が多く生息することが明らかにされている。特にメオトサルボウ（フネガイ科；環境省 絶滅危惧Ⅱ類）が、国内で唯一生息する地域であり、世界的分布の北限であることは重要である。

しかしながら、その海岸生態系は、道路の拡幅や護岸の建設により、危機に瀕している。名和（2008）は、瀬戸内町古志「越地」の干潟（地図①）において、2003年に緩傾斜護岸の建設により、干潟の70%が工事土砂に埋没し、メオトサルボウを含む貝類群集が壊滅的な打撃を受けたことを報告している。

図1は瀬戸内町久慈（地図③）の緩傾斜護岸である。ここでは、干潟部への張り出しは少ないが、本来、砂浜や高潮帯の植生帯になるべき部分が、緩傾斜の張り出しによって狭められている。この形式の緩傾斜護岸は、大島海峡沿岸で少なからず建設されている。

図2は、瀬戸内町久慈「浦」（地図②）の塩生湿地と干潟である。ここには、良好な塩生湿地環境が残されている。塩生湿地や打ち上げ帯には、クロヒラシイノミ（オカミミガイ科）やセンベイアワモチ（ドロアワモチ科）などの希少種が生息している。

図3は、現在存在する石垣護岸で、樹木の日陰になっていることもあって、石垣の間にはシイノミミガイ（オカミミガイ科）などの貝類が生息している。こうした時間の経過した石垣護岸は、貝類・カニ類などの生息地になっていることが多く、不用意に破壊・改修されないことを望みたい。この「浦」においても、道路改修に伴う工事が計画されているようであるが、このような塩生湿地・干潟は、奄美ではごく少なくなっており、その貴重性が理解され、環境と生物が保全されることを期待する。（2016年9月23日）

文献

名和純, 2008: 琉球列島の干潟貝類相 (1) 奄美諸島. 西宮市貝類館研究報告 (5).



地図：久慈湾



図1：瀬戸内町久慈の緩傾斜護岸 2016年



図2：瀬戸内町久慈 浦の塩生湿地 2016年



図3：浦の石垣護岸 2016年

亜熱帯最後の川 ～ リュウキュウアユ年代記

リュウキュウアユ研究会/リバーリバイバル研究所

新村安雄

○亜熱帯最後の川

南西諸島の世界自然遺産への登録が現実となるうとしている。多様な生態系を持つ南西諸島は琉球弧とも言われる連なった島々から成り立っている。その琉球弧の中で奄美大島は他の島々とは異なった自然環境を今に残している。亜熱帯樹林を貫流して海に注ぐ河川とその河川を利用する生き物である。

私は、奄美大島の河川に生息する通し回遊魚の中でもリュウキュウアユの保護に 1989 年より係わってきた。リュウキュウアユは、同じ琉球弧の沖縄本島にも、かつては生息し、そして、絶滅した。沖縄本島最後の生息河川は源河川（名護市）と考えられている。上流域の大湿地（おおしったい）といわれる樹林帯から東シナ海に注ぐ延長 12.8km のこの川のリュウキュウアユは、産卵場に取水堰堤が建設されたことが直接的な原因となって絶滅した。奄美大島からリュウキュウアユの再導入が試みられ、福地ダムとその流入河川での再生産は行われているが、海域に注ぐ河川でのリュウキュウアユ再生にはいたっていない。

海域と河川を行き来する生き物はリュウキュウアユだけではない。しかし、河川上流域から、河口域のマングローブ林、そして珊瑚礁域を含む海域まで、亜熱帯域の様々な自然環境を利用するリュウキュウアユは、通し回遊を行う生き物の中でも特別な存在といえるのではないか。そして、琉球弧のなかで、リュウキュウアユ本来の生活史を完結できるは奄美大島の河川だけなのである。

○リュウキュウアユの発見

リュウキュウアユ (*Plecoglossus altivelis ryukyuensis*) がアユ (*P. altivelis altivelis*) から分離された新亜種として記載されたのは 1988 年、当時琉球大学の西田睦博士による。リュウキュウアユは沖縄島と奄美大島で共通する種とされたが、沖縄本島の個体群は 80 年代にはほとんど確認されず、奄美大島での生息状況についても様々な問題が指摘されていた。新亜種記載に先立つ 84 年、川那部浩哉（京都大学）、東幹夫（長崎大学）、西島信昇、西田睦（琉球大学）の三大学調査団が奄美大島の 9 河川の調査を行い、リュウキュウアユ保護の緊急アピールを行い保護活動の先駆けとなった。

○リュウキュウアユ保護の流れ

- ・1976年頃 沖縄本島でみられなくなる。
- ・1984年 三大学調査団が奄美大島で緊急アピールを行う。
- ・1988年 新亜種として記載される。
- ・1989年 リュウキュウアユ研究会発足
- ・1990年 「リュウキュウアユフォーラム」 名瀬市で。鹿児島県
- ・1991年 「リュウキュウアユフォーラム in なご」沖縄県
リュウキュウアユを蘇生する会 沖縄県 名護市 建設省
- ・1992年 リュウキュウアユ 福地ダムに放流
- ・1994年 魚が上りやすい川づくり推進モデル事業「奄美五河川指定」
10年間にわたり魚道等整備（役勝川、住用川、山間川、川内川、河内川）
- ・2001年 「アユの生物学と保全」 鹿児島大 魚類学会シンポジウム
- ・2002年 奄美リュウキュウアユ保全研究会 （財）鹿児島県環境技術協会
- ・2004年 「リュウキュウアユフォーラム 2004」
主催 奄美リュウキュウアユ保全研究会

○リュウキュウアユの生息状況

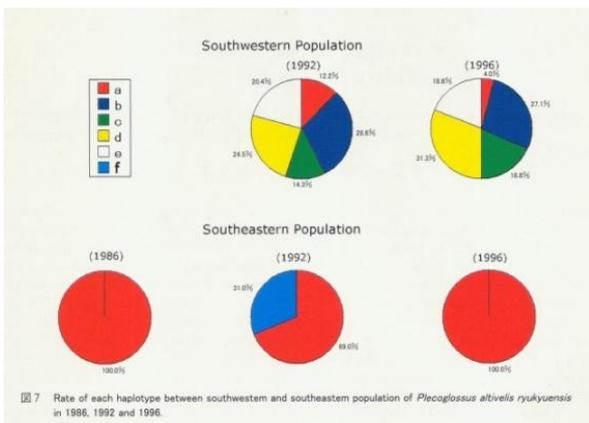
- ・リュウキュウアユのすむ川



リュウキュウアユは奄美大島の12河川で生息が確認されているが、産卵が確認されているのは、役勝川、住用川、川内川、河内川(奄美市)嘉徳川(瀬戸内町)の6河川。

奄美リュウキュウアユ保全研究会は役勝川、川内川、河内川で産卵場整備を行っている。

図に示されるように、奄美大島でのリュウキュウアユの分布は南西部集団と南東部集団に分かれる。戦後すぐまでは、両集団の中間の瀬戸内、加計呂麻島の河川にもアユが遡上したとされるが現在は両集団の間に遺伝的交流は無いと考えられている。



- ・遺伝的な多様性は南西部集団が高い

南東部と南西部の集団の遺伝的な多様性について比較する(ハプロタイプ)と(左図)

上段に示した南西集団の遺伝的多様性が高いことが示されている。(谷口順彦 2001)

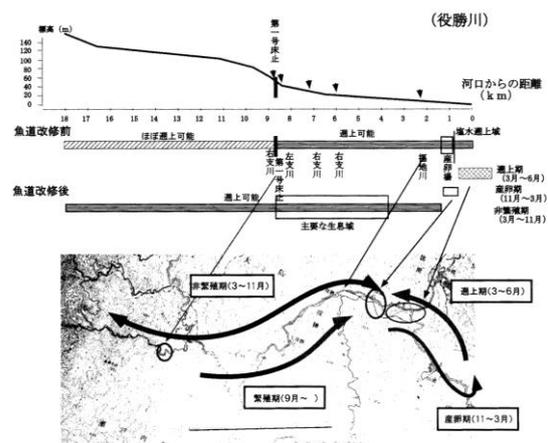
- ・両集団の生息環境

南東部集団で最もリュウキュウアユの生息数が多いのは役勝川で、河口域が隣り合う住用川が島内最大のマングローブ林を有する住用湾に注いでいる。

役勝川については、河川構造物が生き物の移動を阻害しないため生息環境の全てが利用可能で、リュウキュウアユの産卵場も河床条件が比較的良く保たれている。

住用川については、生息するアユの密度は比較的高いが、上流のダムにより下流域全体の河床材料の粗粒化がすすんでおり、産卵床を形成する適当な大きさの礫がすくなく産卵場整備が必要となっている。

川内川については、夏季に瀬切れするなど上流部での開発による影響があり、また魚道設置により遡



上可能範囲は増加したが、堰堤により生息域が限られ、堰堤上流への堆砂によって下流域の粗粒化が進んでいる。川内川の流入する内海には小規模ながらメヒルギ群落が見られる。

南西部集団は河内川を産卵場とする集団で河内川の生息数が多い。遺伝的な多様性は南東部集団よりも高いが、生息数は南東集団、役勝川よりも少ない。河内川では可動堰が撤去され遡上可能域は二倍程度増加した。河内川が流入する焼内湾はかつては汽水域をマングローブ林が覆っていたが埋め立てられた。1990年代までは、一部にメヒルギの群落が残存していたが、2006年時点で、メヒルギ群落は確認できなかった。

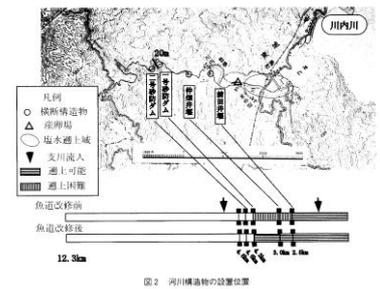
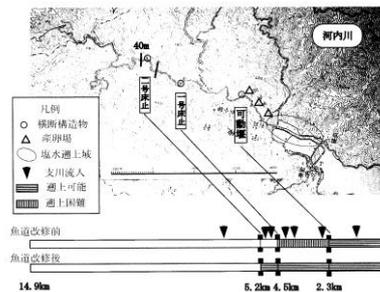


図2 河内川橋梁物の設置位置



○森と川と海と リュウキュウアユを次世代に残すために

・マングローブ林の保全と再生

リュウキュウアユの生活史のなかで、海域での生活については情報が限られていたが、岸野底らが2004年、メヒルギ群落はリュウキュウアユの稚魚期の生活の場所であり、群落の有無が稚仔魚の生残率に影響することを確認した。遺伝資源としての重要性からも河内川のリュウキュウアユ個体群の重要性は大きい。安定した個体数を維持するためには稚仔魚期の生息条件の改善が必要であり、マングローブ林、ひいては干潟生態系の再生が必要と考える。

リュウキュウアユ研究会は2006年より3年間、河内川下流域および焼内湾内で埋め立てによって消失したマングローブ群落の再生を試みる「マングローブかえってこいプロジェクト」略称「まんこいプロジェクト」を行った。

マングローブ再生プロジェクト「まんこいプロジェクト」実施計画書（抄）

2006年3月1日

1. 目的

本プロジェクトは、リュウキュウアユ等の魚類を始めとして、多様な生き物の揺籃の場所として利用される汽水域環境の代表的植物としてのマングローブの分布状況について把握し、その再生の可能性について検討する基本的情報の収集を目的とする。

河内川河口域でのメヒルギ播種実験をへて、焼内湾内にメヒルギの胎生種子を播種してマングローブ再生の可能性を検討する予定であったが、メヒルギの胎生種子の確保に障害が生じた。計画を縮小し、2008年7月、河内川下流5カ所にメヒルギ各1株の植え付け実験を行いモニタリングした。2009年12月時点で3株が活着し、2株は流出した。

標高を変えて植え付けを行ったが、もっとも高い場所、シオクグ群落に植え付けたメヒルギはもっとも成長がよかった。(写真)

尚メヒルギの採取は特別保全地区である住用湾以外の瀬戸内町内、加計呂麻島内で行った。



・森川海の回廊

1950年代、リュウキュウアユは奄美全島の河川で生息が報告されている。現在では南西集団と南東集団に分割されているが、この集団同士の遺伝的交流が回復されることが望ましい。

そのために、個体数が回復しない南西集団の生息域である河内川、焼内湾については海域環境を含めての自然再生が必要であり、瀬戸内、加計呂麻島を含めてのマングローブ再生の可能性を検討したい。

リュウキュウアユ南島集団生息域最南端の嘉徳川は、奄美大島で唯一残った自然状態の砂浜海岸に注いでいる。嘉徳川のリュウキュウアユ個体群は住用湾に注ぐ河川との直接的な交流は少ない可能性があり、嘉徳川、および、嘉徳湾での再生産が重要と考えられる。

嘉徳浜は、沖合の海砂採取により砂浜が劣化して現在護岸整備が検討されている。嘉徳浜の整備については、嘉徳川下流域の環境を毀損しないように進めるべきで、コンクリート護岸によらない保全策がとられることが望ましい。

「リュウキュウアユの保護」という視点から奄美大島の自然環境を概括した。リュウキュウアユを次世代に残すためには、現在の集団を保護するとともに、遺伝的な多様性を回復する取り組みが必要である。そのためには、河川だけではなく、亜熱帯樹林帯、河口域、海域を含めての森(山)川海の回廊を回復する試みが必要と考えている。

(niimuray@goo.jp にいむらやすお 2017/06/01)

世界自然遺産制度、森と海をつながり

安部真理子（日本自然保護協会）

世界遺産とは、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）の世界遺産リストに登録されたさまざまな地域または物などを指す。いずれも過去から現在へと引き継がれてきたかけがえのない宝物であり、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産である。世界遺産条約（世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約）のもと「顕著で普遍的な価値（Outstanding universal value）」を有するものが選定されている。

世界遺産は、1972年の第17回UNESCO総会で採択された世界遺産条約の中で定義され、2016年12月現在、世界遺産は1052件（文化遺産814件、自然遺産203件、複合遺産35件）、条約締約国は191カ国である。

- ・文化遺産：建築物や遺跡など人類が造り出した文化的なもの
- ・自然遺産：大自然の景観や貴重な生態系など自然のもの
- ・複合遺産：文化遺産・自然遺産双方の価値を持つもの

自然遺産の場合は「顕著な普遍的価値」を証明できる完全性（インテグリティ）の条件を満たし、締約国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要。完全性とは、遺産がそれらの特質のすべてを無傷で包含し、その維持が可能であることを示す。登録後に遺産の価値が損なわれた場合は危機遺産リスト（危機に晒されている世界遺産リスト）に登録される。

奄美・琉球世界自然遺産の場合は世界遺産の10の登録基準のうち

- (ix) 陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展において、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である。
- (x) 学術上又は保全上顕著な普遍的価値を有する絶滅のおそれのある種の生息地など、生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含する。

上記2つに相当すると日本政府は判断している

●登録までの流れ

1 条約締約国の推薦

国内の世界遺産候補物件リスト（暫定リスト）の中から条件が整ったものを世界遺産委員会に推薦。

↓

2 専門機関による調査

文化遺産は国際記念物遺跡会議（ICOMOS）、自然遺産は国際自然保護連合（IUCN）が調査。

↓

3 世界遺産委員会（原則年1回）にて決定

●奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界自然遺産（＝奄美・琉球世界自然遺産）の場合の
タイムスケジュール

2017年夏～秋	IUCNによる現地視察
～年末	IUCNの決定
2018年6月	世界遺産会議で正式決定

●奄美・琉球世界自然遺産候補地について自然保護の立場から考える問題点

a) 十分な緩衝地帯が必要

沖縄島北部やんばる地域の推薦地は、東側の多くで緩衝地帯がなく、推薦地域がむき出しになっている。奄美大島と徳之島でも、緩衝地帯がないか、緩衝地帯の面積が小さい場所が多い。世界遺産に登録されると、にわかに周辺にわかに周辺で観光地化が進み開発圧力が高まる傾向がある。今後、将来的に考えられる開発圧力から世界遺産を守るには、推薦書で提示された緩衝地帯では十分ではない。

b) 広い範囲の指定が必要。

固有の生物の生息地として重要な自然環境は、自然遺産としての完全性を保つためすべて世界遺産に登録すべき、つまり絶滅の危機にある固有動植物種の保全のためには、生息地はできる限り広く保全していくべきである。今回の推薦地域は、固有の生物種の分布を反映しているのではなく人間の都合が優先されている。

c) 市民との意見交換の場が必要。保全を進めるには市民の理解と協力が不可欠。

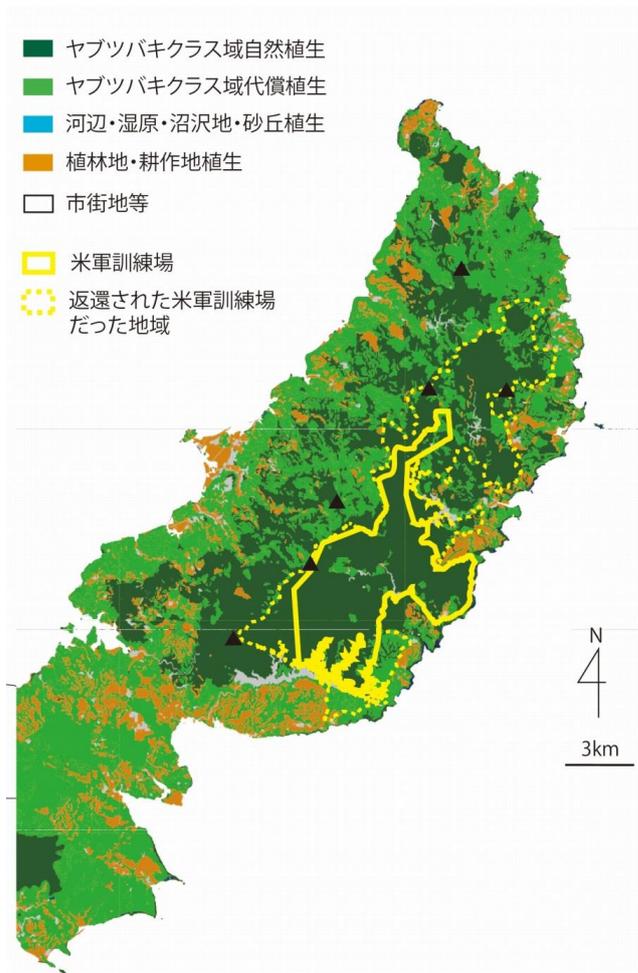
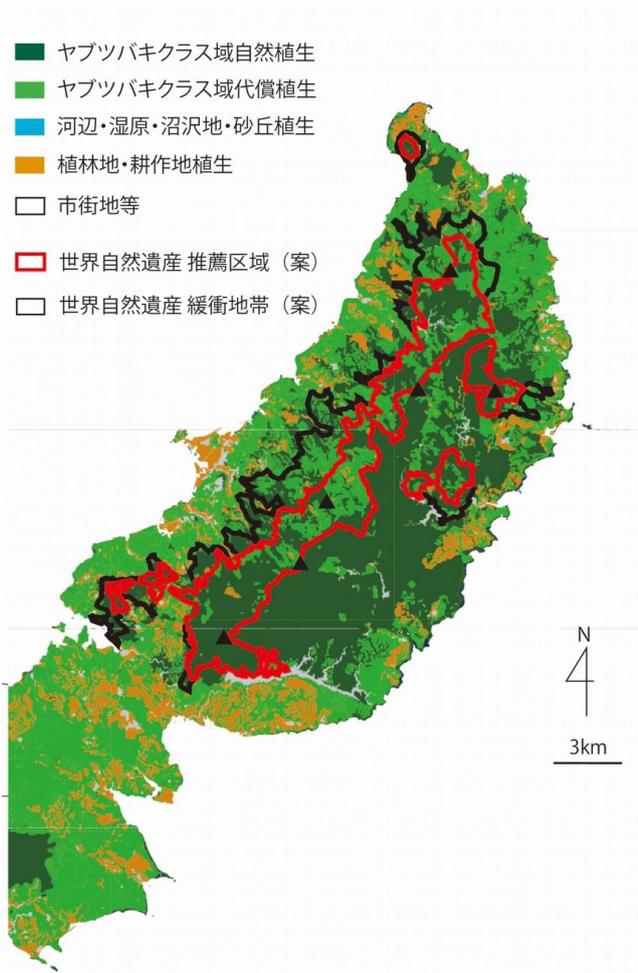
d) 外来種/生物対策

- ・ 候補地の至近距離にある埋め立て計画に、県外から大量の土砂が持ち込まれるため、外来種問題対策が必要である。
- ・ 今後、奄美・琉球世界自然遺産候補地では観光利用の増大により、人と物の移動による外来生物問題が生じる可能性が高い。世界自然遺産にふさわしい対応ができるように、外来種の侵入予防と初期段階での対応及び地域全体での管理体制がきちんと保全計画に位置付けられるべきである。

世界自然遺産推薦地を持つ島々においての、これら持続可能性に欠き、候補地域に影響が及ぶ可能性がある人間活動については、その見直しと、地域の関係者が連携した対策を実施されていることが必要と考えられる。

島全体、海までが世界自然遺産に含まれることは必ずしも必要ではないものの、世界自然遺産登録地の周辺が守られる保護担保措置が取られることは当然である。

そのため環境団体6団体からはIUCNに対し、1) 視察場所の追加と2) 市民との意見交換の場の確保を要望している。2010年に小笠原諸島が世界自然遺産に指定された視察の際には、IUCNと市民の意見交換の場が設けられていたと聞いている。そのような場が奄美・琉球諸島についても必要。

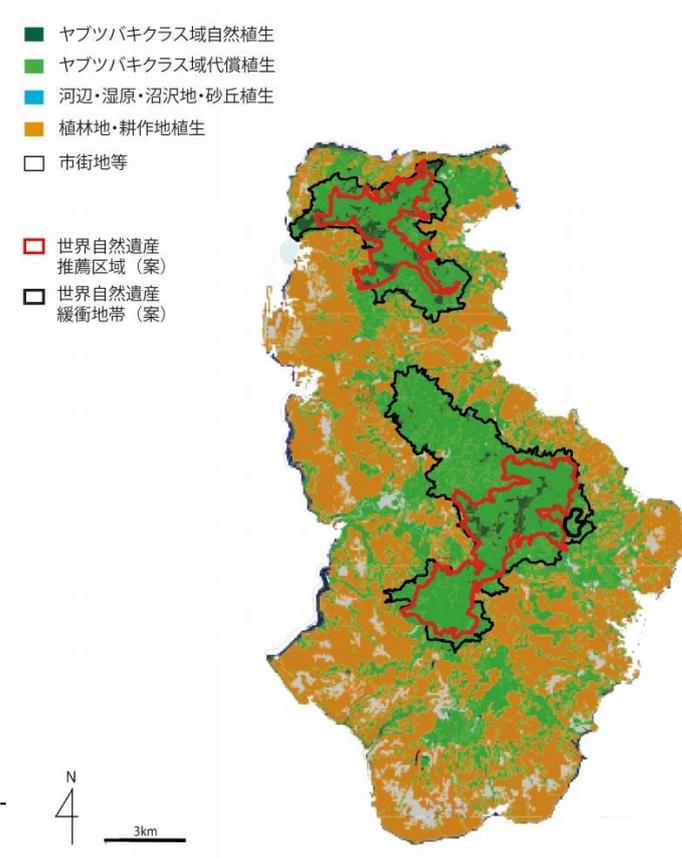
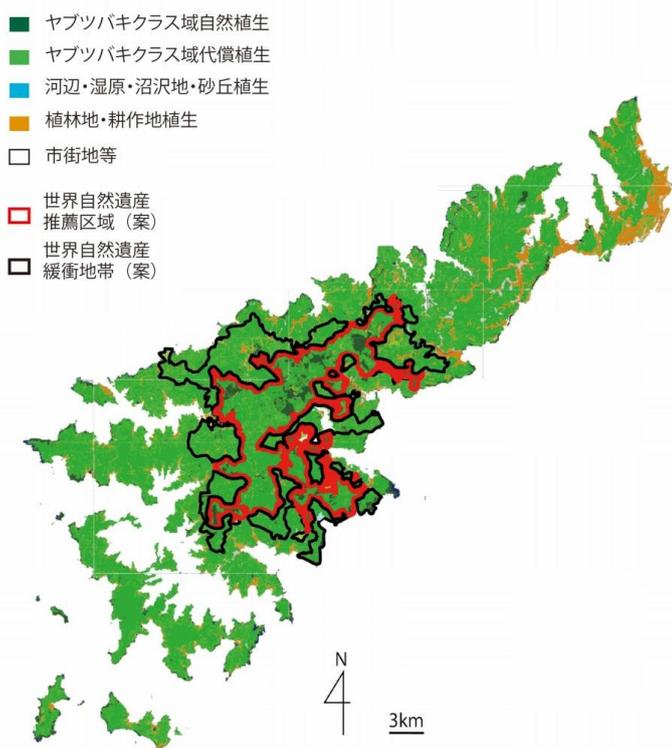


(左上) 図1 (a) 沖縄島北部の世界自然遺産推薦地

(右上) 図1 (b) 沖縄島北部の米軍北部訓練場と2016年末に日本に返還された訓練場

(左下) 図2 奄美大島の世界自然遺産推薦地

(右下) 図3 徳之島の世界自然遺産推薦地



砂浜の生物調査 in 奄美・嘉徳海岸

嘉徳海岸にて海岸生物の調査を行います。砂浜が減少し消滅の危機にある嘉徳海岸は、奄美大島でも数少ない自然海岸です。

この砂浜の生き物を一緒に調査して下さる方を募集しています

日時：2017年6月11日(日)10:00～15:00

場所：鹿児島県大島郡瀬戸内町嘉徳海岸

集合：嘉徳海岸 10:00

午後から嘉徳公民館に移動します

持ってくるもの：濡れても良い靴、帽子、
筆記用具、弁当、カメラなど

参加無料
申込み不要
雨天中止(少雨実施)

←10年以上前の
嘉徳海岸
現在の嘉徳海岸
と比べてみよう

主催：海の生き物を守る会・日本自然保護協会
後援：自然と文化を守る奄美会議

日時：6月11日10:00～15:00

場所：瀬戸内町 嘉徳海岸

集合：10:00 (参加申込不要・雨天中止)

※午後からは嘉徳公民館に移動します

たのしく砂浜の生き物を調べましょう！

ご参加お待ちしております！